

[謡曲の癖]

(イ) 美声の弊

声の美しい人、調子の豊かな人は、必ず天狗であります。

器用に謡いますが、目を瞑って聞いていて、少しも能舞台の上の能の状況を想い浮かべることは出来ません。美声をもって鍛錬を積まない謡は軽薄なものです。

むしろ、美しく謡うというのが第一の邪念であると思います。注意すべきことです。

(ロ) 並ぶ癖

文字の並ぶ癖は、下品な謡とされております。

並ぶとは、こ、れ、は、た、い、ら、の、む、ね、も、り、な、り、という風に、一字一字の間隔が同じようになることです。

初心の中に、曲の位を謡おうとすると、とかくこの姿に陥りやすいものです。

これは、たいらの、むねもりなり、という風に、単語を寄せる心で謡えばよいのです。

謡は、出来る限り、節のあるところをたっぷりと謡って、その他を寄せて謡えばよいので、つまり、運びを完全にするというのと同じ意味になるわけです。

この他、一句一句の中、最初の七文字は、通常大鼓の打ち込むところで大きく謡うのを良しとしますが、次の五文字は、小鼓の打つところで比較的寄せて運んで謡うというようなことも大切な心得です。

全曲の序破急を心得、一節一節の序破急を心得、一句一句の序破急を心得ておればよいのです。

(ハ) 文字割れる癖

謡を下品に聞こえさすのは、文字の割れることです。

割れるというのは、つまり、文字を明瞭に謡おうとする苦心が、例えば、「さ」の音を出し得ず、原素音、即ち「すあ」と出してしまうことです。（九州人の人は、特に要注意です）

又クリ地の冒頭の「そーれ」なども、「そーんれ」と「ん」を入れる癖も要注意です。

(ニ) 文字なまる癖

謡の文句は、その文字を正しく発音するということが大切です。

- ① イキシチニヒミイリを、エケセテネヘメエレで謡う癖
- ② エケセテネヘメエレを、イキシチニヒミイリで謡う癖
- ③ サシセソ音を、「シャシュシエシヨ」音で謡う癖

- ④ ヤユヨ音を、「イヤイエイヨ」音で謡う癖
- ⑤ ガギグゲゴ音の上に、「ン」を加えて謡う癖
- ⑥ ヒを「シ」と発音する癖
- ⑦ シを「ヒ」と発音する癖（東京人は、要注意です）

（ホ）文字の解らぬ癖

文字の発音の曖昧に聞こえる癖には、大体二通りあります。

一つは、文字それ自身の発音のなまりからくるもの。一つは、母音の不明確からくるものです。例えば、ワエヲの音と、アユヲの音とが混合して、不明になっているのが最も多いのです。又、一句の始めに、アイウエオの母音があると、これらの音を全く聞き取れない謡い方もあります。

又、同じ母音が続くとき、或は、廻し、引き等の節の生み字とその下の母音とが同音のとき、それらの場合にそれをはっきり分かせないのが癖である人があります。

例えば、舟弁慶の「夜叉明王」は、「ヤシャミョオヲオ」であるべきを、「ヤシャメョーオー」と謡って、節の引きと母音とを混合している人を往々見受けます。

謡の文字はこれを続けて謡っていても、その文字毎に多少クギリをつけて、竹に節があるように謡うべきです。まるで葱の様に謡っては、文字は少しもはっきりしません。

子音の場合は難しくありませんが、母音の場合は曖昧になりがちです。

（ヘ）飛び出す癖

同吟、連吟、掛合などでも、よく飛び出し謡をいつも謡っていて他人に迷惑をかけるのみならず、自分もそのまずさに人からいつも笑われねばならぬ悪い癖を持った人が多いようです。

この原因の一つは、拍子の心得のないことが第一です。間の間違いです。

二つは、稽古の粗雑（特に、団体稽古）からきていると思います。

これには平生、玄人の謡を充分聞いて心にとめておくこと、又、力のある地頭の指揮によく従う練習をすることが必要かと思います。

（ト）残る癖

息つぎや間のところのみでなく、廻しや吞の如き増節を大きく謡いすぎることにあります。

殊に、修羅物の「キリ」という様な中ノリの謡では、大部分の節を小さく謡って然るべきものですから、決して注意を怠ることは出来ません。

又、静かな「クセ」の様なものでも、字余りの句が多いと、間があってもその間が小さくなりますから、うっかりしていると残されることがあります。注意すべきです。